<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>能動的平和の達成〜対話・連帯・協力による平和〜</td>
</tr>
<tr>
<td>作者</td>
<td>安井 幸子</td>
</tr>
<tr>
<td>編集者</td>
<td>架橋 內田浩文</td>
</tr>
<tr>
<td>期日</td>
<td>2013-03-31</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10069/33736">http://hdl.handle.net/10069/33736</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
(Contribute Activity to Peace)
講話者のプロフィール

今回は、安井幸子さんの被爆体験と被爆後体験です。安井さんは、一九三八年十月十七日、長崎市日出町で川南造船所に務める父・松尾秀さんと母・サヤノさんの長女として生まれました。一九四五年四月、銭座国民学校に入学し、八月九日には爆心地から九○○メートルの目覚町で被爆しました。このとき、二歳の弟が即死。二人の兄、叔父叔母を含め、一か月以内に家族親族二十三名を失いました。

被爆後、父の出身地米原に避難し、翌一九四六年三月まで過ごしました。一九四六年四月、銭座小学校を卒業し、長崎女子商業女子中等部に進学します。一九四七年三月、女子商業高校卒業後、丸善に入社します。二十一歳の時、テレ・ケターと父が尊敬していたマネトマ・ガンジーでした。その後、第一生命長崎支社の事務所長を経て、ヘレン・ケターが設立したマネトマ・ガンジーで、アメとベアのセント・ポールといった外国でも精力的に講演活動を行なっています。タイトルは「能動的平和の達成」ということです。被爆体験と被爆後体験をどう受け止め、発表させるか、ということに非常に自覚的になって活動されている方だと思います。そういうことを念頭に置いてみてください。
かげきの中から救い出される

案内。皆さんこんこんにちは。はじめてお目にかかります。これからおよそ八十分の時間をいただきますよ、よろしくお願いします。今日はわたしの話は、ただ単に過去の原爆被害皆さんにお話しするわけではありません。でも、過去を知ることによって、いま、わたしたちがどういう状況の中から未来をどう見定めたいのだろうか。つまりはどうして都の過去のわたしたしの悲劇というのは、皆さんのが未来の安全のために、そして平和で健康で長生きができる、自分たちの思いが達成できる世の中であって欲しいという願いを込めて、わたしはこれから的时间里皆さんとともに考えながら過ごしていきたいと思います。

アメリカにジョージ・サンターナという哲学者がいます。彼がかつてこういう言葉を残しています。「過去を記憶できないものの、その過去と同じような運命を負わされるだろう。でも単に過去を記憶していることに価値があるわけではない。それを言い残してこの世を去っておらます。」って彼は言い残してこの世を去っておらます。わたしはいつも思うのです。過去の先人たちの素晴らしい感じはもう行行動とかそういうさまざまな歴史を自分たちの心にとまって明日を生きていけば、非常に絶望的な状況に置かれてても
地に埋められたわたしは、叔父によって、あるいは母によって、土を掘り起こし手探りの中で命を救いだされま
した。残りの四名の友達は、生き埋めになったまま猛烈な爆風のせいで鼻の中、口の中に泥が吹きつけてしまった。その
吹きつける泥を追い払ることもできない小さな子どもたちは体いっぱいに砂や泥が詰まって即死していることを、外にい
る大人は知る由ありません。

一人の女の子が叫んだのです。そのとき、お母さんが助けけて、押しつぶされるような叫び声でした。わたしも助けを求
めたかった。しかし口を開けられれば泥砂がさらって入っていく。わたしは口を閉じたままあつあつにささえて一分でも命
が長らるように頑張っておりました。しかし、それにも限界があります。早く誰かが助けてくれなければ、わたし
は生きることができない。そのときです。わたしの一本の足を、表の方にぎゅっと引っぱり出す力が加わります。

次の瞬間、おもいっきりその力は、わたしの二本の足を引き出しました。外に出ました。これが自分の娘だろうかと
思うくらいに、わたしの顔は倍に腫れ上がっていたそうです。爆風によるその爆圧で、わたしの体はものすごく押し
つぶされ、その反動で大きく膨らんだ頭は表の方に引き出されて、想像もできないような状況の中で、なんとに言葉が出すことができたか、おまえには返事ができないのか。わたしはな
にも返事をすることができなかった。母が横にいました。わたしの背中を叩きました。もう自分は返事できないの？

うちがあたたは返事ができないのか。

背中をほんぼん叩かれてわたしは返りました。わたしは泣きながら大きくうなずきました。さる大人がそれを察知し
て、ここにどうもいるらしい、といえずここを撃つということで、雁爪（かんづめ）もスコップもない
二人の大人は、手探りでその瓦礫を払いのけしました。吹き上げる爆風によってさらにさらに押しつぶされる。

力いっぱいいそこせね叔父は一生懸命な思いで瓦礫をのけました。小さな足が見えました。おじさ
小さな子どもの足が見えました。そうか、その子の足を引っ張った。「このままでこの子の足は引っ張ったらどうするんだ。うしろうはもう煙だ。火だ。急ぐんだ。そう言われて母親は、無我夢中でその子どもの足を引っ張りました。中を覗くと二人目三三人目四人目五人目と、子どもがいることをわかりました。そこで、母親が駆け込んでくるんです。わたしは無我夢中で母のうしろの洋服を振り繰り続ける。さあ急ぐんだ。よしこキーはこだ。あたのはこの子を抱いておれのあとをついてくるんだ。わたしは母の後ろを振り繰り続ける。そしてわんわん泣きながら叔父の後ろをついて行きました。叔父は上が十歳の、年齢の大きな方の子どもたちを脇に両方抱えていた。山へ山へ。いまの大雪資料館のある向かいの方に金比羅山があるんでですけど、その中腹のところまでわたしたちは逃げるということになりました。どこまでもでいるかわかりません。わたしはその手足で、わんわん泣きながら母の後ろを振り繰りしめて、瓦礫の上を一懸命、山手の方へ逃げて行きました。

やっとこのごとで山の中腹にはたどり着きました。その道中で怪我を負った人々、たまに振り返るべきですから水をください。自分も飲めなければ、相手に水をやることもできない。振り切らせて、自分の住み慣れた長崎の街を眺めたときに、ここは自分の家も、他の家族を探すことがでていない。腰をかがめて、自分の住み慣れた長崎の街を眺めたときに、ここは自分の家も、すべてのものが崩壊をし、たどるところから炎が燃え上がっていました。わたしはなんとも考えることができない。
なかった。然して自分の街の燃え尽きていくような様子を眺めている以外はありませんでした。そのとき、一番目
の十歳の兄が、息子を切ってわたしたちと巡り会をしました。おり返しの様子を若いほどは見えなかった。
若者とセミをとりに行っていた。その友達の首元
に爆風で飛んでいた瓦礫が突き刺さって、せ다가のまま持ってくる。その子はそこで考え、向かって一家が
入った。山をさまよいながらわたしたちとって何かしらのことで巡り会えたというわけです。
長男の十四歳の兄がいました。石板に熱線の太さがでて負けて、自然で逃げてきました。巡り会をしました。
の様子を父は見て、これでは山の中腹で今日の夜を過ごすことはできないだろうって。
移そう。墓地は平坦だから体を横にすることができるとでした。その言葉。
と長男の弟はやけどで大変な状態でした。その
片隅に身を寄せて、家族はいました。
真夜中近くです。思い余った母が相談し
ました。お父さん、次女のお友達も山に寝たままでして
いた。一番の息子もここに置き去りにして、どうしてわたしたちだけこれから先逃げていけるかすらと必死に頼まれた。それはよくわかり、こうどうすとすることになる。もしあるほど様子をみよ。
おもむくまま、わたしたちは次日早しに
夜をお墓の中で過ごしました。
そして二日目の夜が来たとき、両親は山手の方に登って行ってわたしの友達の亡骸を下の方に運んできました。そ
島原へ逃れるも
立て続けに亡くなる親族

楽しくおしゃべりが弾み、
土の団子を作りながら、
草を刻んでままごとをして遊んでいた。幼いわたしを含め六名
の子どもたちはあっという間に即死をし、そのまま土の中に埋められ
た。子どもたちは泥の中に埋められて、わたしの目に止まらぬ姿
娘の体を触れてもわたしの手に訴えるんです。奥さん、この子の体はまだ熱いんです。何とか助けることはできないか
しら。病院があるわけではない。医者がいるわけではない。
母は自分の洋服の裾を歯で引き裂いてそれを自分の指に

sources: 74
縄わりつけました。そして口の中の泥を取ってあげて、そのあとに子どもは埋葬されました。助けることはできませ
んでした。国際会議の中には生き残った兄や弟がいます。そこで戻りました。

まんじりとしないで二人のそばについたときに父は、誰のものかわからない衣服が風で引きちぎられて、そし
てポロ切れのようになって点在している。紛れを拾い集めることをしました。生き残ったわたちたちの足もとに靴がな
い代わりに、このままでは長崎にいることも生態危険です。逃げていく先は島原半島だ。父の生まれた里があったところ
の爆心地からおよそそこへと向かった。途中いかなることがあってもお父さんの話を聞かなかった。

いずれも真夜中がきました。出発のときです。一番上の兄弟がひどく前に彼が背負われました。一番目の兄弟は、そのときはまだ一人で歩きました。いずれもお父
さんの言霊を忘れなくないように、一歩一歩したちちは逃げる足取りを連なりました。しゃらく歩くと、目の
前に黒い大きなものにぶつかった。よく見ると、それは彼の足ももう前に後ろにくも動かなくなりました。それに気づいたお父さんを抱きしめたような犬と子どもの黒熊
の死体でした。あの子どもの足はもう前に後ろにくも動かなくなりました。それに気づいたお父さんが大きく声で話
すということも、あれほど真っすぐ向けて歩けといっただろう。幼いわたちにそれ以上の恐怖を与えたくないと父の
目一杯の叫びです。驚いた母はわたちを引き寄せました。さあ元気を出して歩くん。そう言われて、足を一步
前にやる。母から引っ張られて動いているようなものです。意識なんにもない。わたしたちはその状態の中で歩き続け
ました。
しばらく行くと、牛や馬が目を丸々あけ、手足を硬直させ、半ば焦げ黒骸の遺体がころさっていました。それらを右に左に、あるいは横きながら、踏みつけたかと見えた。その状態で歩き続けました。そのときの長崎の夜は、人々の生き埋めになったままの遺体に呑みついて、燃や続けた動物をあらゆるものが焼きばれる異臭が長崎の街を一帯に広がっていました。いまの大倉の前あたりも見隠の状態で、その前をわたしはてくてく歩んで四・五キロ、救援列車に乗り込み、四日間飲まず食わずの逃避行が続きました。日目には高崎の駅のホームにつきました。

まず容態が悪くなったのが一番目の子です。お父さんが、ぼくはもう歩けない。何を言おう。あの状態をここまでやっとの思いで来たなんてない。立つもの。いやもう立てない。近くに親戚の叔父が住んでいました。駅に駆け込んできたのは無理だ。小さな病院でもいい、田舎の病院に運ぼう。一番目の子はすぐ病院に運び込まれました。一週間、一日毎に兄の容態は悪くなってしまって、お父さんが当ても知りません。そうしてだ、充血元に触るだけ。子どもに悪める言葉をかけるのが精一杯です。注射を打ってもらっても注射の液が散らばらない。その帰り返しの状態の中で八月二十四日、兄はとうとう元気を出さることができない。飲み薬を与えても全部もどす。

お兄ちゃんの様子がおかしいから、急いで看護師さんにコップを借りて水を汲んでくるんだ。わたしは八月九日。
日の音と光の恐怖が全身に染み渡って、当時田舎の木造建て、一階屋の電気もつっていないような暗い廊下を、一人で水を汲みに行うことができませんでした。でも父は、水は飲まないと、 erfolgreich. に差し出しても、もうその水を口に運ぶことはできませんでした。そして最終に目一杯の叫び。すっかりさよなら。わかります。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させるのではありません。お兄ちゃん、といま声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならず。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させることはありませよ。お兄ちゃん、と声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならず。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させることはありませよ。お兄ちゃん、と声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならず。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させることはありませよ。お兄ちゃん、と声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならず。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させことはありませよ。お兄ちゃん、と声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならず。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させることはありませよ。お兄ちゃん、と声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならず。胸の張り裂けるような悲しみは、わたしに最期の一言も出させことはありませよ。お兄ちゃん、と声をかけてあげてはいなさい。間こえるか。声をだせなければならっ。
彼をたかからしない。絆は思いの深さとか愛情の深さだけではありません。短い糸が一本に掛けるような、お互いに命を掛ける、掛け合った思い。そのことが絆の語源では無いかとも言われた。そういう話を聞いたことがある。

それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それは彼をたかからしない。絆は思いの深さとか愛情の深さだけではありません。短い糸が一本に掛けるような、お互いに命を掛ける、掛け合った思い。そのことが絆の語源では無いかとも言われた。そういう話を聞いたことがある。

それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それは彼をたかからしない。絆は思いの深さとか愛情の深さだけではありません。短い糸が一本に掛けるような、お互いに命を掛ける、掛け合った思い。そのことが絆の語源では無いかとも言われた。そういう話を聞いたことがある。

それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それは彼をたかからしない。絆は思いの深さとか愛情の深さだけではありません。短い糸が一本に掛けるような、お互いに命を掛ける、掛け合った思い。そのことが絆の語源では無いかとも言われた。そういう話を聞いたことがある。

それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それから一週間、九月一月には一番上の兄弟、深い絆の思いを受けて、一番目の十歳の兄と別れました。それは彼をたかからしない。絆は思いの深さとか愛情の深さだけではありません。短い糸が一本に掛けるような、お互いに命を掛ける、掛け合った思い。そのことが絆の語源では無いかとも言われた。そういう話を聞いたことがある。
ばという軍歌を歌いました。海行かば水漬（みづ）く廃（かばね）山行かば草生（くさき）す廃。

歌い終わって、もう一節——一節歌うかとしたとき、父の声がとまりました。長男は目を閉じました。息途絶えました。
発症——いじめ、学業の克服

わたしの体はまず重い貧血に侵され、放射能の後遺症のままずたるものは、この虚脱感から始まること。立ち上がって自分の顔を洗いに行く体力が持たない。放射能の後遺症に負っているは、手を出して取る気力が生まれてこない。立ち上がってしまうことが困難になったという人もいるそうだ。立ち上がってしまうことが困難になったという人もいるそうだ。立ち上がってしまうことがある。立ち上がってしまうことがある。

父が一番大切にしてきた金時計があり、その金時計を、腕時計を、お金は無いか、この時計は何を交換してもらったか、わからない。父は、その腕時計を、いきいきとした瞬間がなかった。その時、手を携えてくれた。

この子に口に入るもののあればと思う、田舎で探してきました。この時計計を、腕時計を、お金は無いか、この時計は何を交換してもらったか、わからない。父は、その腕時計を、いきいきとした瞬間がなかった。その時、手を携えてくれた。

被爆後のわたしがの体験がここからはじまりました。この子も、食べ物はいっぱい受け付けなくなりました。父が一番大切にしてきた金時計があり、その金時計を、腕時計を、お金は無いか、この時計は何を交換してもらったか、わからない。父は、その腕時計を、いきいきとした瞬間がなかった。その時、手を携えてくれた。

農家のおばあちゃんは、お金は無いか、この時計は何を交換してもらったか、わからない。父は、その腕時計を、いきいきとした瞬間がなかった。その時、手を携えてくれた。

元来どんさんが好きな子でした。干しとうどんを一輪でもわけてももらえないだろうか、この時計計に引換え。父は、その腕時計を、いきいきとした瞬間がなかった。その時、手を携えてくれた。

かわいいようだと言われ、それを大切にして、今度は雲仙の裏山にはきのこがとれます。そのときくなった瞬間がなかった。その時、手を携えてくれた。

連れで、元気を取り戻さなければならない。
だけ置いてありました。縫紉の上には、亡くなっていた兄と叔母と叔父の白い骨箱が三つ並べてありました。わた

た

のは、そのときはじめてでした。人間死ねばこんな状態になるのか。わたしが人の骨を、自分の身内の骨を目の前で見た

には兄の姿はありません。そうして島原の雲仙の裏山での避難生活が始まりました。

冬がきました。一枚の毛布を解ってもらいました。その毛布に妹と二人で身をくるんで、その年の冬をしのぎまし

た。高野豆腐、いまだって言う凍り豆腐、これがつくられるのも、ちょうど寒いときその時期です。田舎の人は勤勉に

すためにも、凍り豆腐つくろを手伝ったりと、言われてたちは、夜の二時か三時、ガタガタ震えながら凍り豆

腐の作り方を知る。そしてその豆腐を、雲仙善賢岳の吹き降ろしが寒風にさら

ることを知ったのもこのときでした。そうしてわたしの体は一見良くないつつありました。しかし、なかなか元のよ

うわたしにはなりませんでした。

翌年の春が来ました。わたしが学校へ行っていないので、父が慌てました。なんとしても幸子を学校へ帰らせるな

ければいけない。長崎へ戻らなければならない。家のないところにどうするか、母がそう言っている。母は長崎

の問題を片付けるためにどうしても長崎に戻りたい。どう言っている父は長崎へみんなを連れ戻しました。おいしい蛋白の栄養源であ

ることを知ったのもこのときでした。そうしてわたしの体は一見良くないつつありました。しかし、なかなか元のよ

が集まってきます。

なにあたりに来るんです。そして戦争のときの話、それからの日本のどうなるんだろうという話

81
をするんです。わたしたたが聞き役でした。

朝起きて着的身着のことわたしたは、それこそ学校へ運ばれ校長室に運ばれました。一年生を繰返ししていない児童はもう

一度一年をいかなければならない。いちばんの字も書けなかったわたしたちは、一年生を久しぶりに読むと読むと読んだりしました。そう言っています。校長先生はわたしたたの姿を頭の先から足の先まで聴み

一年生をうそして一年生に進ませました。校長先生はどうして頭を振りません。わたしたたは泣きの談判に入りましょう。そう言っています。約束をわす	

今日のような天気のいい日には、小屋の前で母が直立不動に待っていました。そして木ノ入っていきました。石の

上まで。さあ今日はどこまで進みましたか。教科書を出しなさい。開いてみると教科書は、なんにも書いていない。印だけもつけて大きいとしよ。その印がつくれない。

開いてみると教科書は、なんにも書いていない。教科書を取り上げて、今度は母が学校へ駅け

一年に戻しましょう。担任の先生に相談をする。もう幸子さんはづいぶん弱っている。家に帰って母がわたしたにこんこん

説教をしない。これではだめだ。そして翌日も、またふくふく学校へ出ます。

そこには待っていたかのように、クラス全部の子どもたちをまとめを取り閉む。差別と偏見を構造がそこではありません。差別と偏見を構造がそこにはあり

れた。女のくせに髪の毛はない。首筋には垢をくっつけて、着替える洋服も毎日おならものほっかり。自分の名前も

82
書けていないじゃないか。それじゃもう学校へ行っても同じじゃないか。おまえは掃除だけして帰れ。そう言われま
した。わたしは掃除だけはできるから掃除だけした。でも体がふらつき、汲んできても、ケツの水は途中でこぼす。
教室中水浸し。その後も拭きとって、掃除だけの毎日でした。子どもたちはわたしの持っていた粗末な弁当まです
上げて、昼食へます。でも、いま考えると正むを得ないかな。
食糧はまったくない。誰かが取って食べたのかわからない。

母は毎日のようにわたしに特訓をしました。あるとき一つの問題がとけた。こんなことがわからなかったのかと自
分でも驚くとこに驚けます。夏休みがきました。宿題がきてました。自分で調べて答えを出すことが楽しくなりま
した。そして一学期が始まりました。ガキ大将の坊主たちが宿題を忘れてる。それを手伝ってやることもできるよう
になりました。教室の雰囲気が変わりました。苦しいこと、つらいことがあったから作文を書ききらないと母に言われま
した。めいっぴい学校の勉強をするだけでした。担任

そして翌年の春の結業式の日に、あんなに言った校長先生がわたしに一枚の学業優秀証を渡してくれました。担任
の先生がいまでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いで母さんにして家に戻りました。捜す
見て小屋です。その捜す見て小屋の中で

に小さなお箱が二つひっくり返しておいてありました。紙を買うお金もないし、鉛筆を貸して使う道具なんにもない。
ただわたし

は、の先生がいまでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いで母さんにして家に戻りました。捜す
見て小屋です。その捜す見て小屋の中で

に小さなお箱が二つひっくり返しておいてありました。紙を買うお金もないし、鉛筆を貸して使う道具なんにもない。
ただわたし

は、の先生がいまでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いで母さんにして家に戻りました。捜す
見て小屋です。その捜す見て小屋の中で

に小さなお箱が二つひっくり返しておいてありました。紙を買うお金もないし、鉛筆を貸して使う道具なんにもない。
ただわたし

は、の先生がいまでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いで母さんにして家に戻りました。捜す
見て小屋です。その捜す見て小屋の中に

に小さなお箱が二つひっくり返しておいてありました。紙を買うお金もないし、鉛筆を貸して使う道具なんにもない。
ただわたし

は、の先生がいまでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いで母さんにして家に戻りました。捜す
見て小屋です。その捜す見て小屋の中で

に小さなお箱が二つひっくり返しておいてありました。紙を買うお金もないし、鉛筆を貸して使う道具なんにもない。
ただわたし

は、の先生がいまでくれました。ぐるぐると巻いてそれをわたしに渡して、急いで母さんにして家に戻りました。捜す
見て小屋です。その捜す見て小屋の中に
き、後ろに立ってその様子を見ていたわたしに気づいた母は、大きく手を開いてわたしたことを寄せました。よく頼った、今日のこの気持をあなたは一生忘れていけず頑張ってほしい。お父さんもお母さんも体がすいてぶん揺れてきた。たとえ親に方の一のことがあっただって、それでも学校に行かなければならない。わからないことがあったら先生に相談すればいい。

横にいた父が言いました。お母さんの言うとおりだ。お父さんだってすごいぶん体が弱ってきた。親としておまえになんにも残してやることができないかもしれない。戦争にあっただけだから、原爆にあってわたしは、こんなに悲しい思いをしなければならない。お父さんが言うように、愚痴を吐いた人生ではあってはならない。相手を驚かせるようなことはあってはならない。それを忘れずに渡せる唯一の言葉の財産だ。そう言いました。

その父が肝臓からで亡くなった。一杯の苦労は、自分は食べた方を出してわたしに与えてくれた母も、骨髄性白血病という重度の障害を受けて亡くなりました。一杯の苦労を受けた家族は全部崩壊しました。わたし一人が生き残りとなります。と苦難の歴史が重なりました。このあと、皆さん、これから生きていくあなた方に、何か一つでもお役に立てることがあればとい

展開にさせてもらいます。原爆の脅威は、わたしなにまず何をもたらしたか。サバイバルで生きなければいけないということです。なにかなくなったらした状況の中で生きること、ただ生きることのどのを思い、何かのような大きな被
へレン・ゲラールから学んだこと

わたしが二千一歳になったころ、健康診断を行ったときに一人の医師に出会いました。その先生の手に触れられたのが甲状腺のがんでした。いまだ言うセシウム。それは喉に集まるそうです。そして十歳以下の子どものときの被爆は、
おびただしくそれが表に現れやすいということだろう。いま福島で取りざたされているセンウムの問題です。わたしたちは唯に見事に発生しました。先生の励勧を受けて手術をしてしまいました。一日でも早いほうがいい。原爆病院に入院した時、担当の医師が申し訳なさそうな顔をしてわたしたに言いました。もうちの先生と、緒にがんばろうよ。わたしたしは自分がどうすることもできないから、もちろん麻酔をしていて、そのときはわからないставкаごの時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減くなって声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減くなって声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよいよ一週間も過ぎた頃から、普段であれば、傷がある程度減って声が出る。その声がまったく新しい。だからこそその時、いよ
がするようになります。で、ぼくは今日、皆さんにこうしてお話をすることができます。そのとき、わたしなんは人間の持つ言葉の大切さを身を持って感じました。たった二言で友情という愛の輪が広がるかかもしれない。

落ち込んだ友達に、一言の言葉は勇気を与えることができる。たった二言で友情という愛の輪が広がるかかもしれない。一緒にがんばろうよ！というだけで、お互いが元気になれるかかもしれない。

言葉をかけてやりたいため、それが生きるきっかけになれば、と思うきっかけになりました。それから年を重ねて、その日のことを蘇って思い出しにしたときに、数多くの人が次々に死んでいった胸の中には感じました。それは、自分たちの命は限られているんだね。永遠にあるものではないなんだろう。

学びをとったんです。子どもたちの死を急ぐんだ。子どもたちに学びを伝えたいと。子どもたちに学びを伝えたいと。子どもたちには学びを伝えたいと。子どもたちには学びを伝えたいと。

一生涯に生きた命。わたしなの命もあとどれくらいこの世で与えてもらえるでしょうか。そう思うと若い皆さんに。味噌汁一杯を交え

中を改革する唯一の方法なんです。それは大学生の皆さんにお願いするより他はありません。

一生懸命に生きた命。わたしなの命もあとどれくらいこの世で与えてもらえるでしょうか。そう思うと若い皆さんに。味噌汁一杯を交え、親と子が平和の世の中に。平和とはなんなのかを語って欲しい。そういう親子を作っていただく、これがいまの世

後を継承をお願いするより他に無いんです。この話は楽しい話ではない。逃げたいくらいの話です。わたしなが皆さんに
そのような若い年齢だったから聞きたくない話をしたかった。しかし避けられない。いまこの地球はどういう状態なのかということが、みんなで考えなければいけない。人間として生きていくために最低基準のものがなければ人間は生きられません。これがベーシックヒューマニズムという最低限のものです。食糧にしても、水にしても、家にしも医療にしも、すべて最低限、貧困は言いませんということですね。それがあっての今日のわれわれなのです。

あの方の命を、あの方の平和をこれ以上崩されたらなりません。福島であったこと、東北で起こったことは、他人事ではないんです。どこであっても不思議もない。ここにギリシャ神話が登場します。ダモクレスの神話という神話です。彼は過その後、彼を非難する言葉をどうか。これは神を非難する言葉をどうか。これこそ繁栄を脅かす、ダモクレスの神話ですよ。彼が言われたように、王がおまえが言うほど素晴らしいものではない。このことを身を持って説きまし。王、ダモクレスを王座に座らせました。ダモクレスの神話という神話です。人の上に立って述べ、こんなにいい酒が飲めて、いいご飯が食べられているアイナ。それを見てっとと思った王は、ダモクレスを王座に座らせました。ダモクレスは、今日も美談麗句に聞ま

東北で地震が起こりました。原発が大きな事故を起こしました。家どこか、医療どこか、田地田畑、日本列島の半分を持って行かれたような衝撃を受けました。「米は命」と国際コマ年で、そこ取り上げられています。その米が半分、取れなくなった。そして食糧危機が訪れた。日本の自給率はそれこそお粗末なものである。そうということを考えたとき、この地球上には、核も存在している。原発の危機に誰も手を出せない。そして、原発そのものに手が足も出せるような状態ではありません。小さいときから核と向き合って生きてきたわたしは、その状況から逃げなかっ

88
対話・連帯・協力

平和を考えるとき、わたしは世の中平和だからいいなあ、もう戦争でもないんでだから、過去の六十年も昔の豆腐の上の列島と呼ばれる人もいるくらいです。その豆腐列島の上で原発が四十八基もある。問題はいくつもの伝説の歴史を読むのが、ずさんに安全神話、安全の神話だけ、崩壊の歴史をまれあったんです。過去のできことをわたしたちは忘れてはいけない。

必ずしも試しに吊るされて、自分の頭の上にあった。ちょっと油断をして何かは言え、いつ切れるかわからない。
像ができるお話しだと思うます。そして、その対話の精神は、素晴らしい対話の構築をしていきます。
これが、具体的になさ必要なのか。いまはグローバルな世界です。グローバルの世界は下手にということも悪い
こともあります。全部グローバルに世界中に広まっていこう。そうであれば、わたしたちは素晴らしい心の精神を磨
きながら、そのグローバルな世界の中で平和の発信をしていくことの心、これは大切ではないかとわたしてはいつもある
置くことができます。シモーヌ・ヴェイユ。フランスのある哲学者はこう言いました。相手の心に傷んでいれば、難
なく国境を超えることが
を知って海外に赴けば、必ず長崎のような青年の発信は届くはずであります。これから、どこでどのように生
き、皆さんも生活を続けて行かれるかわからない。そのときの必要点として、このことは良心にとどめて置かれた
高いなあと思う。
対話の精神をもって、そして相手の苦しみの中に自分の心を重ねてみて、理解しろる一杯の中で思う心、痛める
心があれば、洋の東西を問わず歴史は繋がります。そのことがわからずに自分のことばかりを考えて、それで相
手を説得しようと思っても誰もついてこないだろう。ましてや、国際社会では難しい問題が今後も山積みになると思
います。わたしたちの地球も核は依然として堂々と存在し、そして原発の事故も絶えず、中には本当に渦漬るような恐怖
がありません。原爆の放射能の被害をもろに受けたわれわれは、手も足も出せないんじゃないかなあという恐怖心もあり
いうことがわかります。どうか前向きに。真正面から捉えてそれに立ちはだしてもらいたい。
放射線といえば、シーベルトの名前が非常に新聞紙上に出ています。シーベルトというのは放射線の被害の数を表す単位だと思っている人が非常に多いんです。しかし、シーベルトは人の名前なんですね。身長一九〇、体重是一〇〇キロ。堂々とした風格を持っているのに多いです。ストックホルムの奥座の方に、湖がいくつもあるような、甲子園球場二六〇個くらいの森の中にシーベルトの一軒の家がある。大邸宅を構えています。シーベルトの父親は電線事業で大富豪になられた。そのためにシーベルトは若いときに父親の跡をついで、会社のトップに立たれた。しかし、放射線の脅威に備えてつくられた避難室で亡くなられたという歴史も残っています。放射線の研究、防護の研究に邁進し、放射線の脅威を何とか病気をしたときとか、必ず受ける。放射線の研究に目覚まし、無かった。彼らはレントゲンの博士として、それを発見者にした。彼はレントゲンの博士として活躍をされ、レントゲンの歴史に名を刻む。彼らがどうなるか、誰がどう思うか。それは誰が知っている。放射線の歡喜者の第二はいま首を望みます。 reducersの電気を塗ってほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。放射線の歴史を聞いてほしい。もはや生きている。
誰も憶いている人がいないくらいに日本も変わってきた。しかしこれまでの日本とこれからの日本は少し状況が変わる可能性もあるんではないかと思います。わたしがこれからしっかりと未来を展望し、どのように生きていけばいいかということを模索してみたいと思います。もう時間が来てしまいました。皆さん、非常に熱心にお話を聞いているだけ。この話でよかったかなあとわたしは思います。しかし、わたしが皆さんを将来ご無事と発展を願う気持ちに何一つ変わりはありません。どうか自分が今日あるのは、ながら何かの神の恩恵があるものだろうという深い感謝を心の中で決めて残された学業に勤しんでもらいたい。なにもかも取り払われた原爆の被害者が、その思いを胸に立ち上がりました。そして学びを深め、勉強するよう努めなければ、生きる道は無いんです。なぜか、なにもかもなくなっていたわたしは、一旦でも多くの知恵を受け継がなければ、生きる道は無いんです。仕事につけないんです。そのことが、原爆が、わたしが非常に苦しみを覚えた理由だったからです。戦後のことで負けてきたかという思いは、あなたの方の将来に夢や希望をもたらすことと思いまし。あなた方の将来を夢や希望をもたらすということなんです。それが希望というものの根源的な理論なんだ。希望の絶対的根源の理由は、いかにして生き延びるかということなんです。それは非常に大切なものだと思います。わたしがこれは非常に大切なものだと思っています。</document>
質疑応答

朝日新聞の連載の中で、バンクーバーでカナダのインディアンの人たちと交流したというお話がありました。安らぎづつ質問をいただきました。わたしたちは戦後数十年年のときにカナダのバンクーバーで世界の平和大会に出かけてまいりました。そのときにバンクーバーでこうした先住民の方にお会いをして、彼らのフーキミュミュントという特別な区域の中で、先住民の人と一緒に手をとりあって、足を大地に踏みしめるようなお話は出なかったのです。しかし第二次大戦にほとんどどの人がかわかり、戦争が終わったからもお互いの言語はいらないからと、山へ追われそうですね。音楽を作っていく状況の中、平和意識が生まれました。忍受を覚えるためにインディアンはとても手先が器用で、手を取ってくれました。彼らはとても多く、さまざまな人、腰の下まで髪の毛を二つに結って、それを前に太鼓を持って大地を駆け歩く。その追い方に押される。しかし、その人たちは言っていることは真実だ。本当にこの人は苦しみから逃れたんだ。自分たちの手はうるさないように、一緒にダンスをしたのです。これはわたしにとってとても感動的でした。
その内の一人のチーフが言いました。
聞けば長崎は原爆で大変な被害を受けたことは知っている。なに、なぜあ
たは先住民の苦しみをこれほどまでに訴えるのか。わかってくれるのか。とても自分たちにはありがたいし、なぜ
だろうという質問は当然残ります。ともに、苦しみを味わった人間として、手を結べないことはないでしょう。彼ら
は感動しました。わたしをそばに呼び、胸につけたバッッチを、メープルのバッッチをわたしたり渡すんです。記念に持っ
て帰ってくれ。そしてわたしは、彼らの持っていた万年筆からバッッチから金探し手のひらいっぱいだだきました。
そして、歌ともにかみしめて、抱き合って泣き、励まし合いました。わたしがの百年間のもし人生があるとすれば、
その半分です。が、五年間のうちの最高の感激でした。それがカナダインディアンとの出会いでした。